

## 第4回（1985年）東方学術賞

東洋思想の研究およびその成果の普及を目的に設立された財団法人東方研究会（中村元理事長）は、斯学の発展をはかるために昭和五十四年からインド大使館と共同主催により東方学術特別顕彰と東方学術賞を設けて学者の優れた業績を世に広く顕彰している。このほど諸方面の長老の学者で構成されている選考委員会（石田瑞麿、奥田慈應、勝又俊教、田中於菟弥、玉城康四郎、水野弘元、山口恵照、及び中村元）で慎重審議した結果、第4回東方学術賞受賞者6氏が決定、12月5日午後3時から東京・千代田区のインド大使館で顕彰式が行なわれた。

拝啓 中秋の候 貴台におかれましては御清祥のことと御慶び申し上げます  
さて 財団法人 東方研究会におきましては 本年度もインド大使館と共同主催にて 学者の秀れた業績を世に広く顕彰することに致しました

先般来 選考委員会において慎重審議の結果 第4回東方学術賞受賞者は  
特別顕彰として 酒井真典殿（前高野山大学学長）  
学術賞として 山口瑞鳳殿（東京大学教授）  
学術賞として 原 實殿（東京大学教授）  
学術賞として 瓜生津隆真殿（京都女子大学教授）  
学術奨励賞として 田上太秀殿（駒沢大学教授）

なお本年度は特別に

追悼学術顕彰として 故 土井久彌殿（東京外国語大学名誉教授）  
の学績を讃えることに決定しましたので 左記の如く 顕彰式を行ないます

一、場 所 インド大使館

東京都千代田区南九段二丁目二ノ十一（千鳥ヶ淵）

一、日 時 昭和六十年十二月五日（木曜日）午後三時

つきましては 御多用中恐縮ながら御来駕の榮にあずかりたく ここに御案内申し上げます 敬 具

昭和六十年十一月吉辰

財団法人東方研究会

理事長 中 村 元

各 位

第4回東方学術賞受賞者に決定したのは、東方学術特別顕彰として酒井真典前高野山大学学長、東方学術賞として山口瑞鳳東京大学教授、原実東京大学教授、瓜生津隆真京都女子大学教授、東方学術奨励賞として田上太秀駒沢大学教授の各氏。また本年度は特別に東方追悼学術顕彰が故土井久彌東京外国語大学名誉教授に贈られる。

東方学術賞の選考基準は、誰が見ても立派で功績を積んだ学者となっており、毎回、特別顕彰は八十歳前後の長老の学者、学術賞は現役で活躍している学者、学術奨励賞は現役の若い学者にそれぞれ贈られている。

酒井前高野山大学学長は、真言密教、ヴァジラヤーナ（金剛乘）研究の権威者でありサンスクリット原典をチベット訳文や漢訳文と対比しながら詳細に研究、その成果は『酒井真典著作集』5巻（法蔵館、すでに3巻が発行）にまとめられている。

山口東京大学教授は、チベット学者としては世界的に認められており、大著『吐蕃王国成立史研究』（岩波書店）は日本学士院賞を受賞している。インド文化、サンスクリットの豊かな知識を生かしてチベットに及ぼしたインド化の影響について精密で独創的な幾多の研究を発表。ヨーロッパ第一のチベット学者と言われるスタン博士に最も信頼されている弟子である。

原東京大学教授は、マハーバーラタにおける苦行の研究で東京大学から文学博士号を受け、また、パーシュパタ（獣王）派の研究により米国・ハーバード大学から博士号を受けており、その業績は国際的に高く評価されている。最近、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク、イタリアの諸大学で講義して帰国した。

瓜生津京都女子大学教授は、インドの中観派の研究に精励し、サンスクリット文献のみならず、チベット訳文を自由にこなしている。ユクテシャスティカ（六十頌如理論）、シューニャタサブタティ（空七十頌）などについての研究から成る『ナーガールジュナ研究』（春秋社）は新しい分野を開拓したものであり、ラトゥナヴァリ（宝行王正論）についての研究も注目されている。

田上駒沢大学教授は、禅に造詣が深く、菩提心の研究に傾倒し、幾多の著書を著わしている。財団法人東方研究会の総務として長年、尽力した。

故土井東京外国語大学名誉教授は、東京外大と東海大学で多年ヒンディー語を教え、同氏の『ヒンディー・日本語小辞典』は我が国における最初のヒンディー語辞典。そのほか文法なども編纂、昭和五十四年にはインド政府から世界ヒンディー賞を授与されている。東方研究会の東方学術賞選考委員をつとめた。

※『中外日報』（1985年11月22日）

受賞者喜びの言葉・その業績

授賞式に先立って、受賞者六氏の喜びの言葉を紹介し、併せて東方研究会の事業部門としてユニークな活動を行なって諸方面から注目されている東方学院の活動を紹介する。

#### ・若い後輩の刺激にも 地味な密教学の酒井真典氏 東方学術特別顕彰

酒井真典前高野山大学学長 （1908年生まれ、高野山大学密教学科卒。高野山大学名誉教授。密教学専攻）

名誉ある賞を頂戴することになり、嬉しく思っている。密教学は地味な学問で、今まであまり日のあたることがなかった。私個人のことだけでなく、同学の若い後輩たちにも大

いに刺激になると思うし、長年の研究活動を認めていただいて誠にありがたい。

私の研究は、真言密教の所依の経典である「大日経」と「金剛頂経」など瑜伽部の密教、インドの後期密教に属する無上瑜伽系の経典を対象としている。「金剛頂経」の系統には、古来、十八種の経典と儀軌を叢書的に撰した十万頌大本が存在したことが、不空訳の「十八会指帰」によって知られる。この十八種の経軌のうち、初会の「真実撰経」と第六会一七巻理趣経第十五会「秘密集会」の三種は、既に先賢によって証定されていた。私は、チベット仏典の研究を通して、他の経軌を探索、十八会の中の幾つかの経軌を発見、証定し得た。個々に発表した論文は法蔵館の『酒井真典著作集』第3巻に納めた。

「大日経」の先駆思想を扱った論文は、学位論文「大日経の成立に関する研究」と『著作集』第1巻の中に、無上瑜伽系の密教に関するものは『著作集』第4巻に収録した。

私が学問を始めたころは、無上瑜伽系の密教については余り研究が進んでおらず、参考書や辞書も不十分で色々と苦勞をした。梅尾祥雲博士や多田等観先生には多くの恩恵を受けた。

現在はチベット学、密教学の研究も盛んになって、隔世の観があるが、若い人たちには、まだまだ頑張っていたきたい。外国へ留学することも昔から比へれば容易になっているし、これからの人達は世界の学界の頂点に立つ気概を持って、研究を進めていただくことを望んでいる。

#### ・文法研究に力注ぐ チベット語学の山口瑞鳳氏 東方学術賞

山口瑞鳳東京大学教授 (1925 年生まれ、東京大学文学部印度哲学梵文学科卒 東京大学教授。チベット学専攻)

私はもともとチベット語学という文法学の勉強をするようにと中村先生に忠告を受け、そういうものを始めたものですから、当分はチベット語の文法の研究に力を入れていきたいと思います。チベットの人たちにはインド・コンプレックスがあり、吐蕃時代にできた文典に非常に拘泥した。ためにチベット語の文法的研究はずいぶん遅れています。だから外国人がチベット語を勉強しようとしてチベット人の著わした文法書を読んでも、またそれを紹介するような文法学を著わしたヨーロッパの学者のものを読んでも、だめなのです。

私は元来、外国人がチベット語を読めるようにチベット語の研究をする目的を持っていましたし、多少いろいろなものを読んできたので、それをひとつまとめたと思っています。チベットの勉強をするについては、やはり仏教学の勉強をやりたいと思っています。今は若い方にそういう仕事をなさる人も大層増えましたので、その点では大変けっこうなことです。私なりにもう少し、チベットの仏教学を紹介できればいいな、と思っています。

ただチベットのことをやるというと、一人で何でもやらなくてはなりませんので、歴史の勉強もしているわけなのです。具体的にはダライ・ラマの政権成立史に注目し、昔から心がけて資料を集めておりますが、それなりに難しい点もあります。吐蕃王国成立史とともに研究の対象にしていきたいと思っています。

・良き師と良き弟子、これから勉強、と原實氏 東方学術賞

原 實 東京大学教授 (1930 年生まれ、東京大学文学部印度哲学梵文学科卒。東京大学文学部教授。インド文学専攻)

今回の受賞は中村先生、また先輩諸氏のお蔭です。御礼申し上げます。私は良き師と良き弟子に恵まれて大変幸せです。これからまた大いに勉強しなければいけないなど、そう思っております。

・大乘仏教の真髄 親鸞聖人 本願寺派の瓜生津隆真氏 東方学術賞

瓜生津隆真 京都女子大学教授 (1932 年生まれ、東京大学大学院印度哲学科卒。京都女子大学教授、文学部長。インド仏教専攻)

受賞の知らせを受けて驚いている。光栄です。

哲学者として知られている龍樹菩薩(ナーガールジュナ)の研究は、従来、その著年の中論を中心になされてきた。しかし、龍樹菩薩の著作はほかにもたくさんある。十住毘婆娑論やユクテシャスティカ(六十頌如理論)もその一部だ。こうした書物や伝記等の研究を通して、龍樹菩薩というお方は、大乘菩薩道の実践者であったことがおぼろげながら分かってきた。龍樹菩薩のそういうお姿を紹介しようと努めてきた。

ユクテシャスティカやシューニャタサプタティ(空七十頌)はチベットに残っている文献だが、私は、これら龍樹菩薩の手になる文献研究で先駆的な役割を果たされた山口益先生の研究成果を手掛かりとして、さらに展開しようと試みた。特にユクテシャスティカは大乘菩薩道の思想と実践を明らかにした書物だ。十住毘婆娑論は韻文と散文のうち韻文で書かれた偈頌の方だけが龍樹菩薩の著わしたものと推論している。

私が研究している中観派の大乘仏教と、私が所属している浄土真宗本願寺派の教義との間に矛盾があるかどうかということについては、親鸞聖人が消息(手紙)の中で、浄土真宗の教えを「大乘の中の至極なり」と述べておられ、そういう仕組みで双方は結びつくと考えている。つまり、宗祖聖人は、「菩薩」の思想と実践を内容とする「大乘仏教」の真髄を展開された。

かつて私は宗門の機関誌『宗報』に連載したものをまとめて『仏教から真宗へ』と題して出版したが、その中で「浄土真宗というと特異で理解しにくいところがあるが、仏教の教え(菩薩道)の中から当然展開される教えである」と書いた。それは龍樹菩薩の示された大乘仏教、つまり菩薩行、利他行、慈悲の実践ということに尽きる。龍樹菩薩は、伝記によれば、超俗的な立場には立たず、積極的に社会の中に飛び込んで大乘菩薩の姿を顕わされた。我が宗門は、そういう意味で、閉鎖的になってはいはしないか、もっと開かれた宗門でなければと思っている。

・インド大使館も協力 真面目な学者を世間へ  
東方研究会中村元理事長

日本におけるインド研究、仏教研究は盛んに行なわれていますが、全体的にみると、研究者はあまり恵まれているとは思えません。世間的に業績が知られていない。国立大学で

も旧帝大だけが、隅っこの方で研究している感じです。新制大学では請義もされておられません。

真面目に研究している学者がいることを世間の人々に知らせることが、学問を発展させる一助になりましょう。7年前(1978年)、東方学術賞の制定を考え、いろいろな人に相談すると、みなさん賛同して下さった。とくに四天王寺の奥田慈應管長は熱心にすすめて下さいました。東方研究会を設立したのも、この方面の学問を盛んにしたいと思ったからで、正直なところ、この学院も私が生きている間は何とか続けていけるが、死んだらどうなるか判らない。学術賞の方も、最初考えたことは、僅かな資金を残しておくから、これで学術賞の方の賞金に充当して欲しいくらいに考えていた。ところが学院が順調になり、賛成される方も多く、じゃあ、早速始めましょうということになり、1979年から開始することが出来ました。その際、よりしっかりした賞にしたいと思い、インド大使館と共同主催でやりたいと大使館に相談しますと、大使館も賛同され、大いに激励されました。

今回で第四回を迎えますが、インド大使館はじめ諸方面からのご支援、ご協力に深く感謝申し上げます。

#### ・業績を知られていない人も顕彰

##### 東方学術賞選考委員・日本大学教授 玉城康四郎氏

インド思想と仏教が軸になって、それに関係する分野で長老の方の業績と、第一線で活躍している研究者の業績、新しく研究を進めている若い方の業績という三つの部門に分けて、それぞれの学界における貢献、業績を学術的に評価して、一般に熟知させていくことに東方学術賞の一番の意義があります。

学術的な価値は、なかなか公平に、十分に知られるというのはむづかしい。従って従来、別の機会で賞をもらっていない方々で、充分評価しうる業績のある人があちこちにいるわけですから、そういう人たちをできるだけ評価して、学界や一般に知らしめていくということが、もう一つの目的です。

いくつかの学界の賞がありますが、必ずしもそれで充分であるとは言えないし、立派な業績を出していてもよく知られていない人たちがいるわけですから、そういう人たちを評価していくことが大事なねらいになっています。

#### ・人生における区切り 幅広い研究へ 東方学術奨励賞

田上太秀氏 (1935年生まれ、東京大学大学院印度哲学科卒。駒沢大学教授。インド仏教、禅思想専攻)

東方研究会並びにインド大使館共催の学術賞を頂くことは名誉で身に余る光栄です。奨励賞は、いつまでたっても学に励めということで、なまけ者の私には得がたいことと思います。これからの研究に大きな励みとして嬉しい限りです。

このところ、純学問的論文をあまり発表していなく、今までの知識、特に釈尊の教えと道元禅師の思想との比較という点についての研究をやっている関係で、一般的な本を書き続けてきましたが、ライフワークの菩提心の研究について一応のまとめをつけましたので、今後、それを土台にした幅広い仏教研究を試みたいと思っています。

私自身、大学の頃から約二十年、中村先生のおそばで勉強させてもらい、先生にここまで引っぱってきて頂きました。今回の受賞は私の人生における区切りとして感謝していません。

#### ・ヒンディー語の故土井久弥氏 追悼学術顕彰

故・土井久弥東京外国語大学名誉教授 (1916 年生まれ、東京外国語学校ヒンドゥスターニー語部貿易科卒。東京外国語大学名誉教授、東海大学教授。ヒンディー語学、ヒンディー文学専攻)

授費式は、東方学術研究会関係者及びインド大使館関係者ら約 100 人を集め、午後 3 時から始まった。

マーダバン・インド大使が挨拶に立った。まず大使は、「学業を讃えるということはインド古来からの伝統です」と、各氏にお祝いの言葉を述べた後、学生時代に習ったというサンスクリットの諺を披露しながら、「インドで生まれたブッダの教えは、インドの価値そのものであり、インドでも広く信奉されているが、その教えを世界中に広めることが我々の仕事でもあります」と、文化交流の重要性を指摘した。また、マーダバン大使は「今日ここで受賞された方々は、みなタパスというものを体得された人たちだ。タパスとは、宗教的な非常に高い段階を経た人が得るものであるが、しかし重要なことは、そのタパスという精神的な境地を何に用いるかということだ。或る人は神・仏のために、また或る人は自分自身のために用いるが、私はそれを、他人のため社会のために使わなければならないということを感じて疑わない」と、力強く締めくくった。

引き続き、選考委員でもある山口恵照氏（大阪大学名誉教授）が一同を代表してお祝いの言葉を述べたが、その言葉には、学問の真の姿といったものが刻み込まれていて、印象深いものがあった。

まず山口氏は、東方研究会について、「東方学院との緊密な連携のもとに、インド学・仏教学を中心として、広く内外で研究と教育に尽くしてこられた」と述べた後、今回の授費式に触れながら次のように語った。

「このように学績の顕彰が盛大に行なわれたことの意味は、次のような点にある。つまり、学問研究という一つの営みが、いわば大きな学術共同体というようなものを形づくり、世代と世代とを貫いて連綿と展開され、末長く人類の文化の進展に寄与すべきものであることを示している点に、今回の賞の意味があるのであり、本日は誠に意義深いものを感じております」と。

最後に、受賞者を代表して酒井氏がお礼の言葉を述べた。酒井氏は、「受賞者一同、今まで以上の精進に励みたい」と述べた後、「私事で恐縮ですが」と前置きして、「私の専攻している密教学は、あまり日の当たらない地味な学問であったが、今度このような賞をいただき、後進の者ともども、誠に頼母しく思っています」と喜びを語った。

奈良康明氏の、関係者へのねぎらいの言葉で閉会となり、その後一同は別室に移り、インド大使館の好意による立食パーティーで和やかに歓談し、散会した。

以上、『中外日報』（1985 年年 12 月 13 日記事）